

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集

岡山大学津島北地区
小橋法目黒遺跡(A W14区)の発掘調査

1985

岡山大学埋蔵文化財調査室

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集

岡山大学津島北地区
小橋法目黒遺跡(A W14区)の発掘調査

1985

岡山大学埋蔵文化財調査室

序 文

岡山大学埋蔵文化財調査室による構内遺跡の調査研究は開始以来早くも3年目を迎えようとしている。その間に明らかにされた諸事実は、岡山地域の歴史を考える上で欠くことのできない資料を含んでいる。

今回報告する小橋法目黒遺跡は調査室設置の直前に実施されたもので、本学文学部考古学専攻大学院生が主体となり調査を進めたものである。緊急な調査体制はきわめて不十分なものであったが、内外各位の協力を得て無事に遂行することができた。

本遺跡は岡山大学津島地区文学部・法学部・経済学部の敷地内にあり、弥生時代中期および平安時代にかかわる貴重な資料を得ることができた。その後、農学部構内でも縄文時代晩期に遡る遺跡が発見され、津島地区一帯にはなお多数の各時代の遺跡が存在していることが予測されるに至った。今後、これら諸遺跡をあわせ検討しつつ、その調査と保護、活用を進めていくことが必要と思う。

発掘調査は、矢板に囲まれた狭い範囲において、しかも湧水を伴う中で実施され、調査に従った院生諸君の苦労は大変なものであった。さらに院生としての研究活動のかたわら、整理を進め報告原稿を執筆した努力に対して心から敬意を表したい。

なお、調査および本報告書の作成にあたっては、岡山市教育委員会文化課および施設部をはじめ本学事務局各位の協力と援助を受けた。ここに記して感謝したい。

1985年3月

岡山大学埋蔵文化財調査室長

近 藤 義 郎

例 言

- 1 本書は岡山市津島中、岡山大学津島キャンパス内に所在する小橋法目黒遺跡の発掘調査報告書である。遺跡名は、調査地点が字名である「小橋」と「法目黒」の境界にあたることから両者を合わせて本名称とした。
- 2 本調査区は岡山大学津島構内座標によると、AW14区に位置する。今後の調査によって検出される遺構との関連を知るうえで必要な正確な位置は、構内座標基準点の設置をまって呈示したい。
- 3 調査は、岡山大学津島地区排水基幹整備工事にともなう事前調査として実施した。
- 4 調査は文学部近藤義郎教授・稲田孝司助教授・宇垣匡雅助手の指導の下に、同大学院文学研究科学生乗岡実・吉村健・小池幸夫・賛元洋および同研究生家田淳一を調査員として実施した。
- 5 農学部畔柳鎮教授に植物遺体に関する助言をいただいた。
- 6 調査期間は1982年10月28日から11月24日までであるが、12月23日に北側に隣接する地区で作業をおこなった。
- 7 整理作業は吉村健・小池幸夫・賛元洋・家田淳一がおこない、岡山大学大学院文学研究科学生田中裕介・高井健司、岡山大学埋蔵文化財調査室吉留秀敏・栄一郎の各氏が協力した。
- 8 本書の執筆は第1章、第5章1、第6章を吉村健、第2章を乗岡実・吉村健、第3章を小池幸夫・家田淳一、第4章を家田淳一、第5章2を栄一郎、第5章3を賛元洋が担当した。
- 9 遺物の実測は、土器・木器を吉村健・小池幸夫・賛元洋・家田淳一・高井健司、石器を賛元洋・栄一郎がおこなった。遺物の写真撮影は吉留秀敏・田中裕介が担当した。
- 10 編集は家田淳一と吉村健がおこない、吉留秀敏が協力した。
- 11 遺物の実測図の縮尺は、原則として土器 1/3、石器 2/3、木器 1/4、であるが、写真の縮尺は任意である。その他の縮尺に関しては、それぞれに明示した。
- 12 本報告で使用した方位は磁北である。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経過	
1 調査に至る経過	3
2 調査の経過	3
第3章 層 序	
1 試掘調査	5
2 調査区	5
3 立合調査	8
4 小 結	8
第4章 遺 構	9
第5章 遺 物	
1 土 器	12
2 石 器	12
3 木 器	12
第6章 まとめ	21

図 目 次

第1図 岡山大学津島地区 周辺遺跡分布図	2
第2図 津島地区平面図 (試掘調査地点)	3
第3図 調査位置図	4
第4図 調査区および周辺の土層柱状図	5
第5図 調査区内土層図	6
第6図 立合調査地区土層図 (西壁)	7
第7図 土層模式図	8
第8図 古代の遺構	9
第9図 弥生時代の遺構	10
第10図 溝SD1・2・3堆積状態	11
第11図 杭1～3検出状況	11
第12図 出土遺物1 土器	13
第13図 出土遺物2 石器	14
第14図 又鍬復原模式図	14
第15図 出土遺物3 木器	15
第16図 出土遺物4 木器	17
第17図 出土遺物5 木器	18
第18図 出土遺物6 木器	19
第19図 出土遺物7 木器	20
第20図 津島地区字名と条里の推定	21

図 版 目 次

図版 1 調査区近景

- 1 調査区近景（南から） 2 調査区近景（北から）

図版 2 調査区全景

- 1 調査区全景（西から） 2 調査区全景（東から）

図版 3 調査区内の土層堆積状況

- 1 東壁 2 南壁 3 西壁（崩壊前） 4 北壁

図版 4 遺構（1）

- 1 S D 1 横断面（東壁南端） 2 杭 1 出土状況（南より）

図版 5 遺構（2）

- 1 杭 2 出土状況（南より） 2 杭 2 出土状況（西より）
3 杭 3 出土状況（東より）

図版 6 出土土器（1）

- 1 第 8 a 層出土土器 2 S D 2 出土土器

図版 7 出土土器（2）

- 1 S D 2 出土土器 2 S D 1 出土土器他

図版 8 出土木器（1）

- 1 又鋤 2 杭 1 3 杭 4

図版 9 出土木器（2）

- 1 杭 3 2 棒状加工木 3 棒状加工木 4 棒状加工木

図版 10 出土木器（3）および石器

- 1 棒状加工木 2 棒状加工木 3 棒状加工木 4 板状加工木
5 棒状加工木 6 石器（1・2 石鏃 3 剥片）

表 目 次

第 1 表 出土土器観察表	22
---------------	----

第 2 表 出土石器観察表	22
---------------	----

第1章 遺跡の位置と環境

小橋法目黒遺跡は岡山市津島中3-1-1に所在し、岡山大学津島北地区の文学部講義棟の北側に位置している。

本調査区の北側はわずか250m程で半田山山塊に達し、東へ約2kmで旭川西岸に至る。本遺跡を含め津島地区一帯は、半田山山塊と龍之口山山塊の間を南流する旭川の沖積作用によって形成された狭義の岡山平野の一角にあたる。半田山山塊の南側一帯には旧河道がいく筋も流れていたものと推定され、それらに沿った自然堤防の上には縄文時代晩期ないし弥生時代前期以降集落が営まれていたことが津島遺跡^{注1}、南方遺跡^{注2}などの調査成果からうかがえる。

一方、半田山山塊の南側一帯は古代条里制の遺構が比較的よく遺存している点でも重要である。津島遺跡では条里制の地割りにともなうとされる畦が検出されている。

津島地区構内は、1907～1908（明治40～41）年に旧陸軍屯営建設のために約1mの厚さで盛土がなされており、現在はそれ以前の地形をうかがうことはできないが、遺存する字名に「坪」の地名がみられ、構内にも条里制に関連する遺構の存在が予測される。

注1 岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』1970

注2 出宮徳尚・神谷正義他『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』1981 岡山市遺跡調査団



- 1.一(古墳, 中世) 2.宿古墳群 3.妙見山城跡(戦国) 4.一本松古墳群 5.一(弥生) 6.一(弥生)
 7.ダイミ山古墳 8.半田山城跡(戦国) 9.都月坂古墳群 10.鳥山城(戦国) 11.七ツ坑古墳群(弥生, 古墳)
 12.お塚様古墳 13.朝寝鼻貝塚(縄文後期, 中世) 14.津島江道遺跡(弥生) 15.津島遺跡(縄文晩期～中世)
 16.神宮寺山古墳 17.広瀬遺跡(弥生, 古墳) 18.南方遺跡(弥生, 古墳) 19.上伊福遺跡(縄文晩期～中世)
 20.上伊福西遺跡(弥生他) 21.津倉古墳 22.妙林寺遺跡(弥生) 23.一(弥生他) 24.石井廃寺(奈良～中世)
 25.一(弥生他) 26.一(弥生) 27.岡山城(戦国～江戸) 28.天瀬遺跡(弥生) 29.高柳城跡 30.一(中世) 31.一(古墳)

第1図 岡山大学津島地区周辺遺跡分布図 1/37500

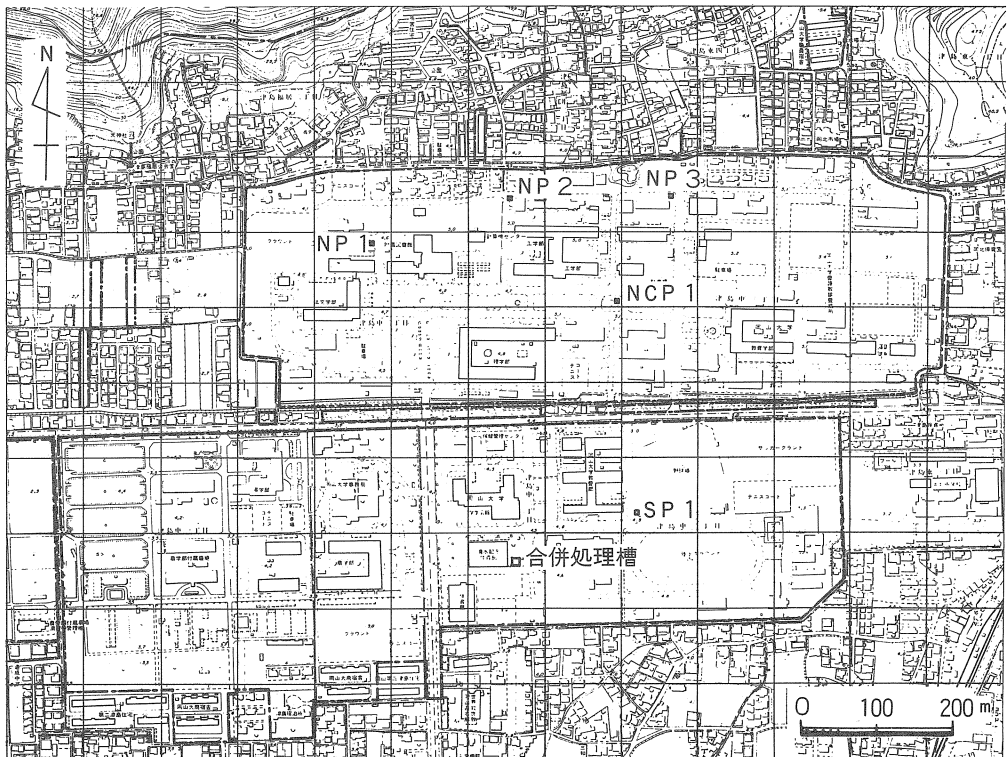
第2章 調査の経過

1 調査に至る経過

岡山大学津島キャンパス内において昭和56年度より3ヶ年計画で排水基幹整備工事が開始された。そのうち57年度分の実施にあたり、工事予定地に対して岡山市教育委員会職員立合のもとに昭和57年10月4日に6ヶ所で試掘調査をおこなった。その結果、文学部構内にあるポンプ室予定地（NP1地点）において土器細片および木器が確認された。明確な包含層と遺構の存在が不明なために、同年10月22日に工事立合を市教育委員会文化課職員の立合のもとに実施した。その結果、現地表下約3mから弥生時代の包含層を検出した。これにもとづき、岡山市教育委員会、岡山大学埋蔵文化財保護対策検討専門委員会、同施設部の3者は協議し、文学部近藤義郎教授の意見を聞いた上、例言にあげた調査員に調査を依頼し、10月28日から11月24日まで発掘調査を実施した。

2 調査の経過

調査は鋼矢板で囲まれた一辺5m程の範囲である。作業は攪乱された遺物包含層（溝SD2埋土）の調査から始めた。その後は土層観察用の壁を四辺に残しつつ掘り下げたが、この過程

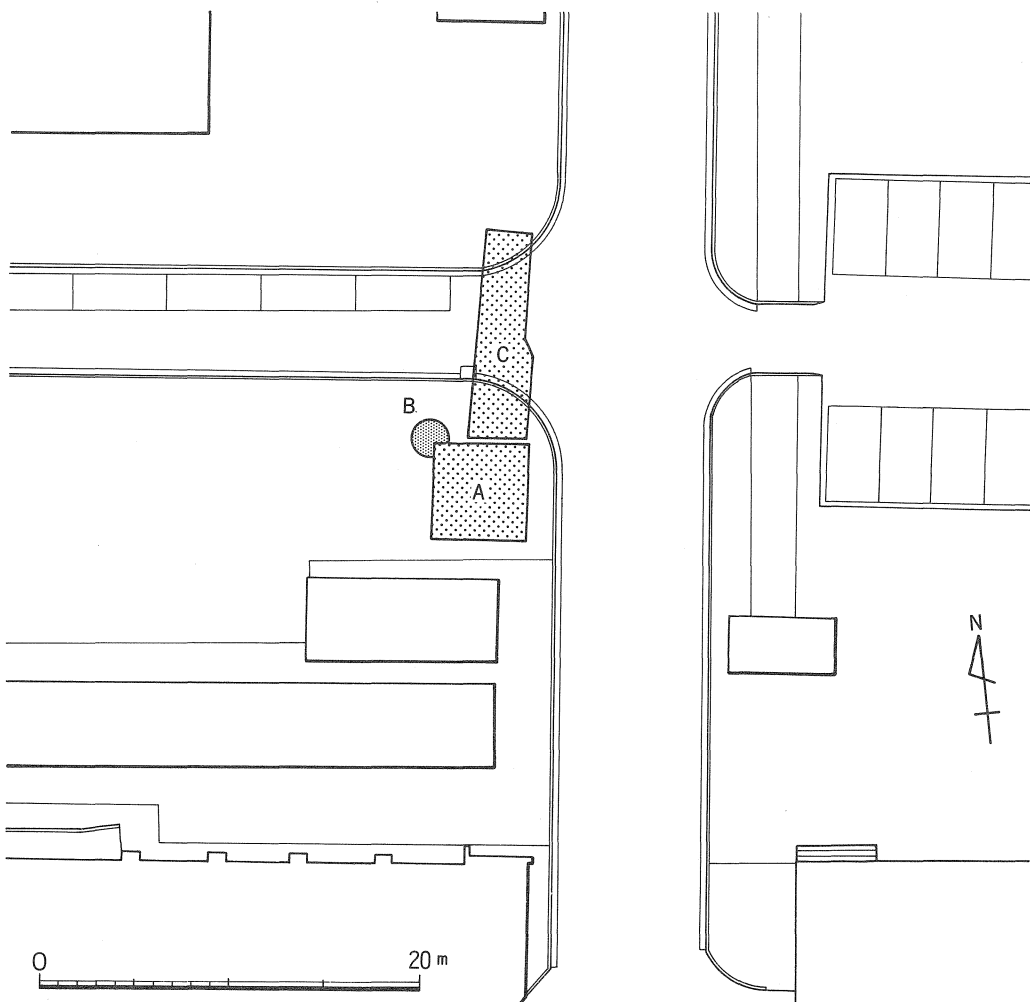


第2図 津島地区平面図（試掘調査地点） 1/10000

調査の経過

で溝SD1とSD2が確認された。これらの調査は遺物の出土位置を記録しながら進めた。その後、SD2の基盤層である第9層に1本の杭が打ち込まれているのが見つかった。この杭と第9層以下の状況を検討する目的で西壁に沿って深掘りトレンチを設けた。しかし、トレンチの掘り下げの過程で西壁が崩壊したために土層観察はトレンチの東壁でおこなった。そのため第9層より上位に関しては記録しえていない。土層図の作成終了後、四辺の残存部分の調査にかかったが、その過程で新たに2本の杭が第9層に打ち込まれた状態で検出された。

なお、調査の終了後、同年12月23日に本調査区の北側に隣接した水道管埋設工事により、南北方向の掘削が実施された。工事立合の結果、掘削深度は先の調査区内遺構検出面より上位に留まり、土層断面図を作成し調査を終了した。



第3図 調査位置図 (A.発掘調査範囲 B.試掘調査部分 C.立合調査部分) 1/400

第3章 層 序

層序は調査区以外に、岡山市教育委員会による試掘調査と北接しておこなった立合調査によっても資料が得られた。以下別々に記述し、最後にまとめた。

1 試掘調査（第2・3・4図）

岡山市教育委員会による試掘調査結果をNP1、NP2、NCP1の三地点に代表させ概述する。

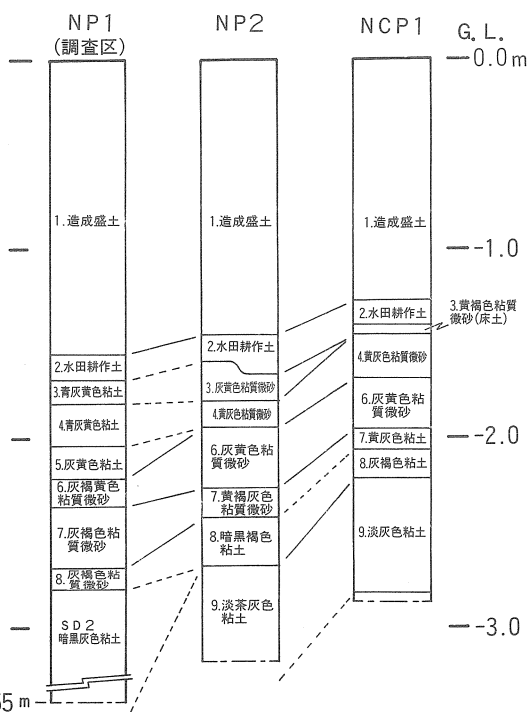
三地点の層序は基本的に次の9層にまとめることができる。第1層は造成盛土で、1907～1908（明治40～41）年の陸軍の屯営建設工事による造成土である。上面は現在の表土である。第2層は、その直前の水田耕作土と床土である。第3層から第8層までは、近代より弥生時代までの累層で、ほとんどが水田耕作土と考えられるが、第6層の土器細片を含めて時期の特定はできなかった。NP2、NCP1では第8層の下に第9層とした自然堆積層が確認された。しかし、NP1では木片などの有機質を含む暗黒灰色粘土層（溝SD2埋土）が76cm以上堆積していることが確認された。

2 調査区（第5図、図版3）

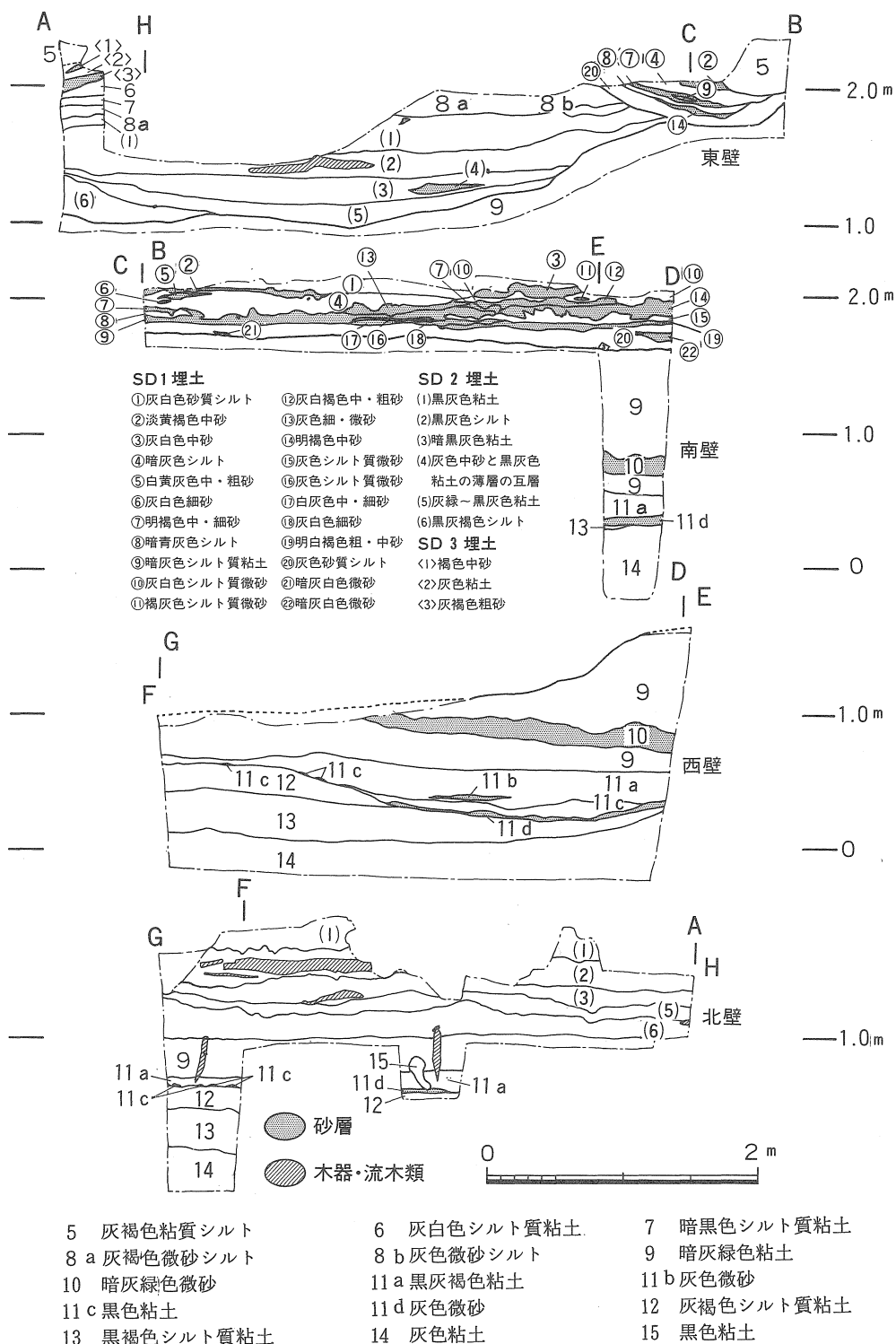
調査区では上部を重機によって掘削したため、標高2.4m付近以上の土層は観察できなかった。調査区東壁では第5層以下が観察された。上から灰褐色粘質シルト（第5層）、灰白色シルト質粘土（第6層）、暗黒色シルト質粘土（第7層）、灰褐～灰色微砂シルト（第8層）、暗灰緑色粘土（第9層）である。また溝SD1～3が切り合った状態で本壁に認められる。これらの溝は遺構の項で詳述する。

第5層は平安時代前半期と考えられるSD1の直上に堆積し、堆積時期の上限が示される。第6層はSD3によって切られているが、この溝は時期不明なため、時代の特定は困難である。しかし、レベルより推定すればSD1より下位にあたり、平安前半期ないしそれ以前と推定される。

この第6層と下層の第7層は、調査区内で-3.55m



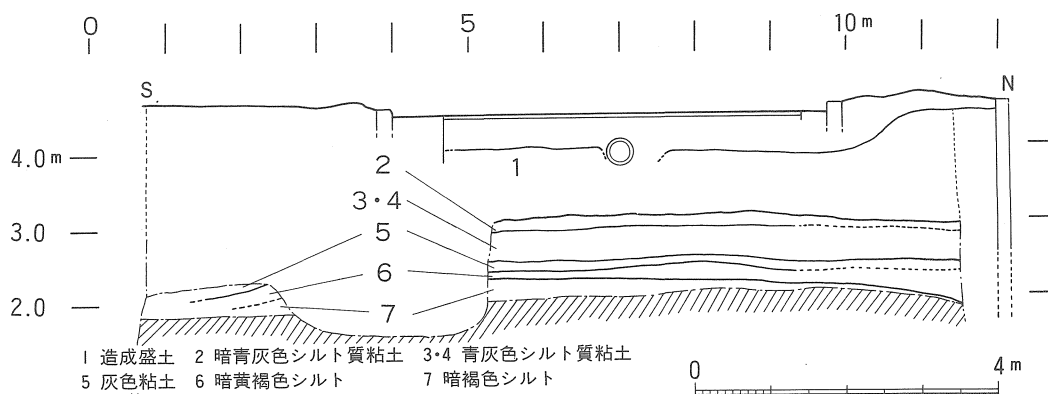
第4図 調査区および周辺の土層柱状図



されず、詳細は不明である。第8層はSD2の直上に堆積するが、a・b2層に細分できる。両層とも南側をSD1によって切られている。また第8a層最下部より30数片の土器片が出土している。細片が多く時期をとらえるものは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての甕の口縁部（第12図-1，図版6-1-1）と平安時代前半期の杯身（第12図-4，図版6-1-4）の2点のみである。以上のことから、本層の下限はおおよそ平安時代前半期と推定される。第9層は、上面がSD1とSD2の底面にあたり、これらの溝内埋土とは不整合関係にある。本層上面がSD2の掘形上面にあたるか否かは確認されなかった。本層中からは上層より打ち込まれた3本の杭以外は人工遺物は出土しなかった。

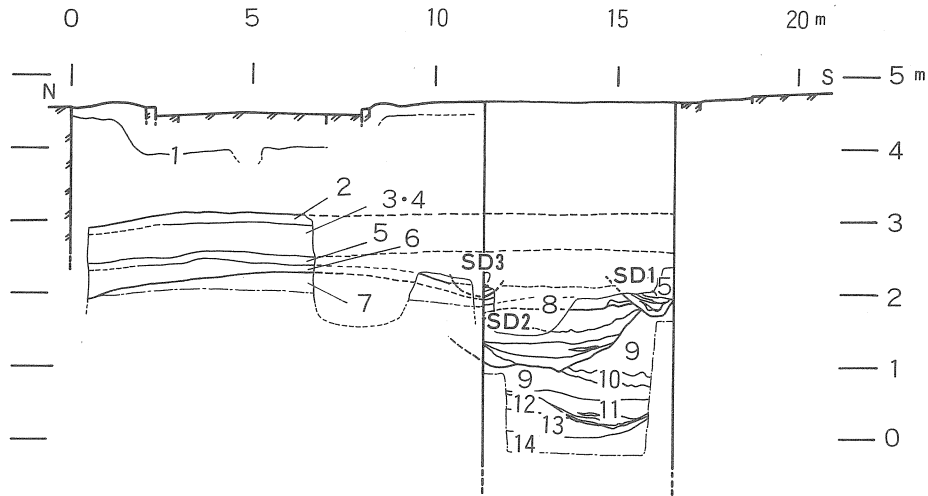
南壁は、そのほとんどがSD1の溝内埋土であるが、西端幅50cmのトレンチによって標高-25cm位まで観察された。SD1の埋土は大略、砂層と粘土層の互層であるが、詳細は遺構の章にゆずる。

西壁は当初断面観察の主壁として設定し深掘りトレンチを設けたが（図版3-3），実測直前に西壁が崩壊してしまった。そのため二次的の処置として、深掘りトレンチの東壁を観察した。したがって、第9層より上位は検討できなかった。第9層より下位は、暗灰緑色微砂（第10層），黒色～黒褐色粘土・灰色微砂（第11a・b・c・d層），灰褐色シルト質粘土（第12層），黒褐色シルト質粘土（第13層），灰色粘土（第14層）の自然堆積層である。第9層は東壁において述べたように層上面がSD1とSD2の溝の下底面を示しているが、本壁においては、SD2の部分のみを図示している。上面は重機の攪乱をうけ約3分の1しか元来の溝の底を残していないが、南北両壁より大方の状況は復原できる。第10層は、第9層の中位やや下に位置し北から南へゆるやかに傾斜しており、レンズ状の堆積と推定される。重機の掘削によって北端は不明であるが、SD2によって削られていた蓋然性が高い。第11層はa～dの4層に細分され、自然流路と考えられる。第11a層に木葉や草木状の有機質が流入していたが、b～d層も含めて人工遺物は全く発見されなかった。第12層および第13層も自然状態の木片・木葉等をやや多く



第6図 立合調査地区土層図（西壁） 1/100

層 序



第7図 土層模式図

含む。両層とも層中に薄い微砂層が複数観察され、第13層下底は南側でやや立ち上がる。第14層も木葉等を含むが第12・13層に比較し粘性が強い。

北壁は、大部分がSD2の埋土であり、深掘りトレンチと杭2のトレンチ以外は第9層をわずかに掘り進んだレベルで停止した。西壁で説明した層以外は第15層（黒色粘土）のみであるが、部分的なブロックである。

3 立合調査（第6図）

立合調査では、上部より造成盛土（第1層）、暗青灰色シルト質粘土（第2層）、青灰色シルト質粘土（第3・4層）、灰色粘土（第5層）、暗黄褐色シルト（第6層）、暗褐色シルト（第7層）の7層が確認された。第2層以下は北へ向かってゆるやかに下がる。この立合調査区は発掘調査区に北接するがSD3は確認されず、おそらく鋼矢板によって破壊されたものと考えられる。また工事に必要なレベル以下は掘り下げなかったため、SD2も検出されなかった。遺物も未検出である。

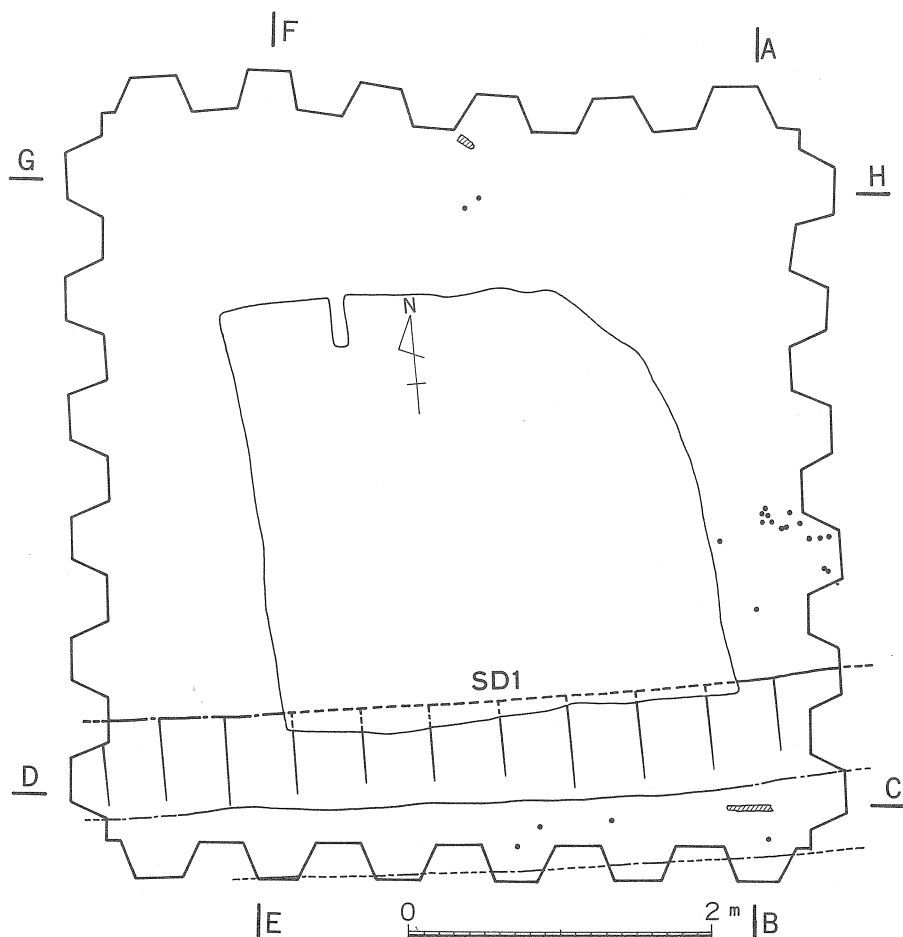
4 小 結（第7図）

以上、三つの調査によって得られた土層はおおむね一致する。層番号は統一させてある。第1層は近代の造成盛土、第2～8層は近代以前の水田層の累積層と考えられるが、今回の調査知見では上限は平安時代前半期である。しかし、各層ごとの正確な時期比定は今後の課題とせざるをえなかった。第9層以下は無遺物層である。自然流路や比較的豊富な植物遺体の存在から低湿地的な環境が想定される。

第4章 遺構

本調査によって検出された遺構は古代（SD1）と弥生時代（SD2）および時期不明（SD3）の三条の溝である。

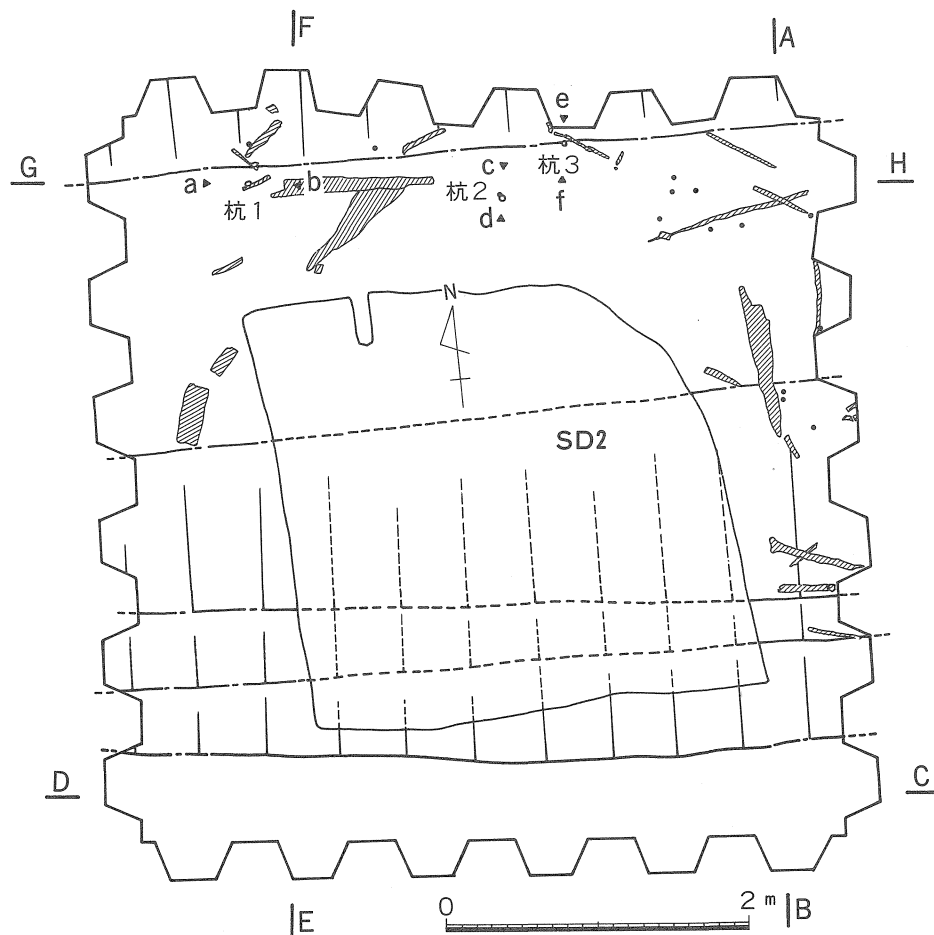
溝SD1（第5・8・10図，図版3・4-1）は調査区南端に検出され，走向はN87°89'Wを測る。南側半分は調査区外になり，正確な規模は不明であるが，東壁断面では幅約1.5mと推定される。深さは約30cmである。上部は削平されており，元来の規模はさらに大きくなる。溝内埋土（第①～②層）の堆積状況はおおむね，砂層と粘土層，シルト層の互層である。第②層下面は溝の底面であるが，西端は東端より約15cm低く，流れの方向が東から西であったことを想定させる。第②層からは少量の遺物が出土したが，これらはいずれもさほど磨滅していない。出土土器（第12図19・21，図版7-2）より平安時代前半期に埋没したと考えられる。



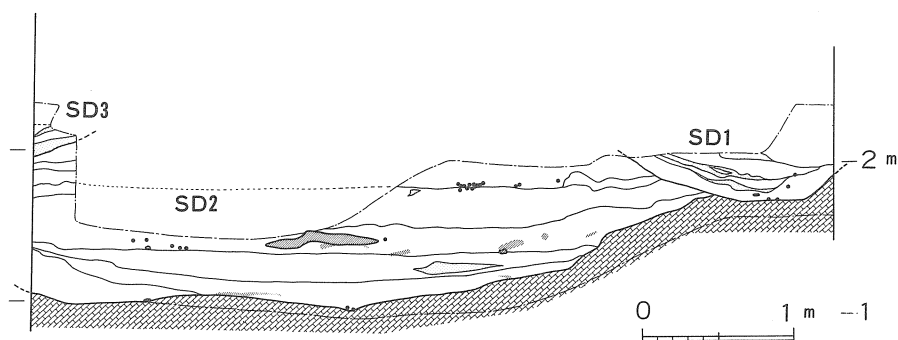
第8図 古代の遺構（・は土器の出土地点を示す） 1/50
 〰〰〰は木器・流木類

SD2 (第5・9・10・11図, 図版2・3・4-2・5)はSD1とほぼ並行して検出された。走向はN85°~89°Wを測る。北側の掘形は未検出であるが, 7 m前後の幅が推定される。深さは80 cm前後である。溝内埋土(第1)~(6)層)は黒褐色の粘土層を主体とし, 砂層の堆積は少ない。溝内埋土の観察から最低2回の掘削が推定され, 第(6)層上面は再掘削面と考えられる(第10図)。また北壁を観察すると, 第(6)層下面の東西両端の比高差はほとんどみられず, 流れの方向は不明である。砂層の少なさも考慮に入れば, おそらく埋没段階においてゆるやかな流れの溝だったと考えられる。全ての層にわたって木片などの有機物が豊富であり, 中でも第(2)層に多くみられた。出土遺物には土器片, 石器, 木器があり, 種子, 貝殻, 動物骨片も少量検出された。以上は主に流れ込みの状況で出土した。

溝底面北側で検出された3本の杭は, いずれも上部を欠失しているが打ち込まれた状態で出土した。杭1と2は共に杭の先端が第11 a層に達している。杭3の先端は第12層に達している。



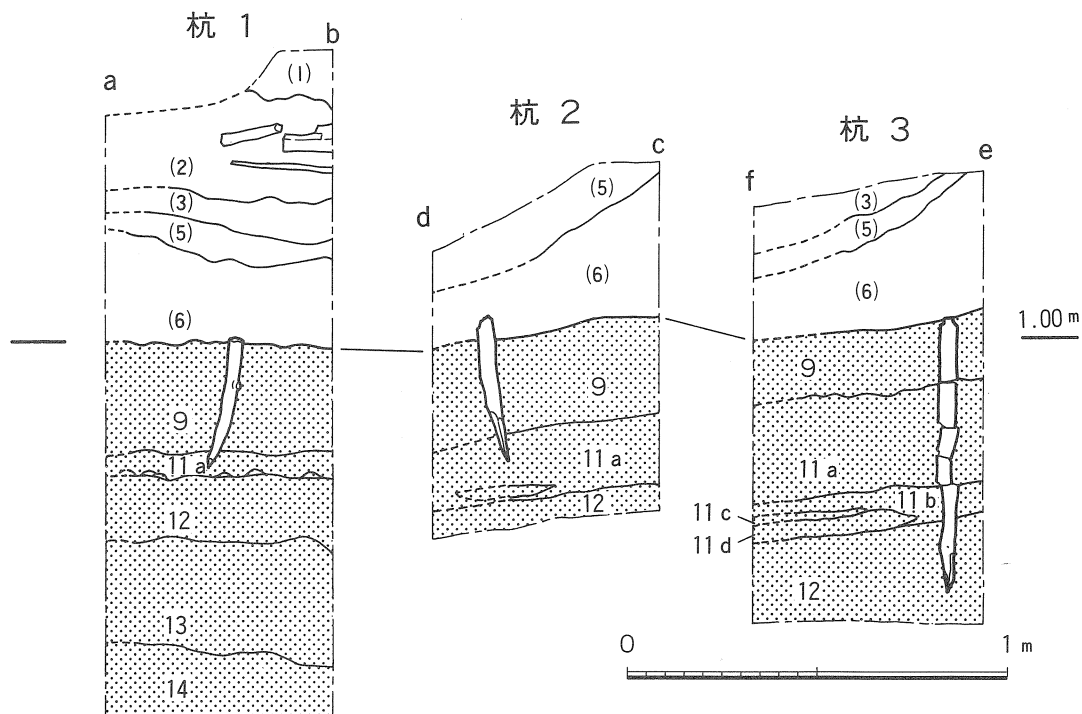
第9図 弥生時代の遺構 1/50



第10図 溝SD1・2・3堆積状態 (層名は第5図参照) 1/50

いずれも溝内の初期の掘削面に打ち込まれたものと考えられる。杭は直線に並ばず、溝底の平坦面から北側の掘形斜面に移行する付近に打たれている。溝の時期は、出土土器(第12図5～18, 図版6-2・7-1)より弥生時代中期後半と考えられる。

SD3(第5・10図)は、調査区東壁のみで確認された。幅は1～2m前後と推定される。走向は不明であるがおおよそ東西方向と判断される。深さは30cm位と推定される。遺物は未検出であるが、SD1と同様に第5層の下面を掘形上面とすることから近接した時期を考えている。埋土は砂層と粘土層の互層である。



第11図 杭1～3検出状況 (層名は第5図参照) 1/20

第5章 遺 物

1 土器（第12図，図版6・7）

本調査で検出された土器は弥生土器を中心に総数230点余りを数えるが、主に溝内埋土より出土した細片である。そのため、図化、検討に耐えうる破片はわずか21点にとどまる。これらは出土状況によって大きく3群に分けることができる。

1～4は第8a層から出土した一群である。1は直立する口縁拡張部に櫛描の平行沈線文を施す甕で、下田所式と呼ばれるものである。4は底部に貼り付け高台を持つ須恵器の杯で、平安時代前半のものと思われる。

5～18は溝SD2内の埋土に包含されていた一群である。5～15は第(2)層、16は第(5)層、17・18は第(3)層から出土した。5・6・7・8の甕はいずれも外反する口縁に上下に拡張された端部が続き、断面は三角形を呈し、拡張されてできた端面には凹線文が施される。また、9の高杯は「ハ」の字形に広がる脚部に三角形の透し孔をもち、脚端部は逆三角形を呈するように肥厚するものである。これら5点の土器は、いずれも従来仁伍式と呼ばれているものに相当する。17についてもこれらと同様の特徴を示し、第(2)層と第(3)層の堆積した時間差はさほど大きくないものと思われる。

19・21は溝SD1内の埋土に包含されていたものである。19・21は須恵器の杯で平安時代前半頃のものと思われる。

20は出土層位が不明であるが、土師器の皿であり、やはり平安時代前半のものと思われる。

以上、土器を3群に分類し、その各々について簡単な記述を加えた。ここで今一度発掘区内の状況を整理すると、杭を伴うSD2は弥生時代中期後半に埋没し、その後、平安時代前半に至って新しい堆積土（第8a層）が覆い、さらにその土層を掘り込んでSD1が造られた、という有様を復原できる。

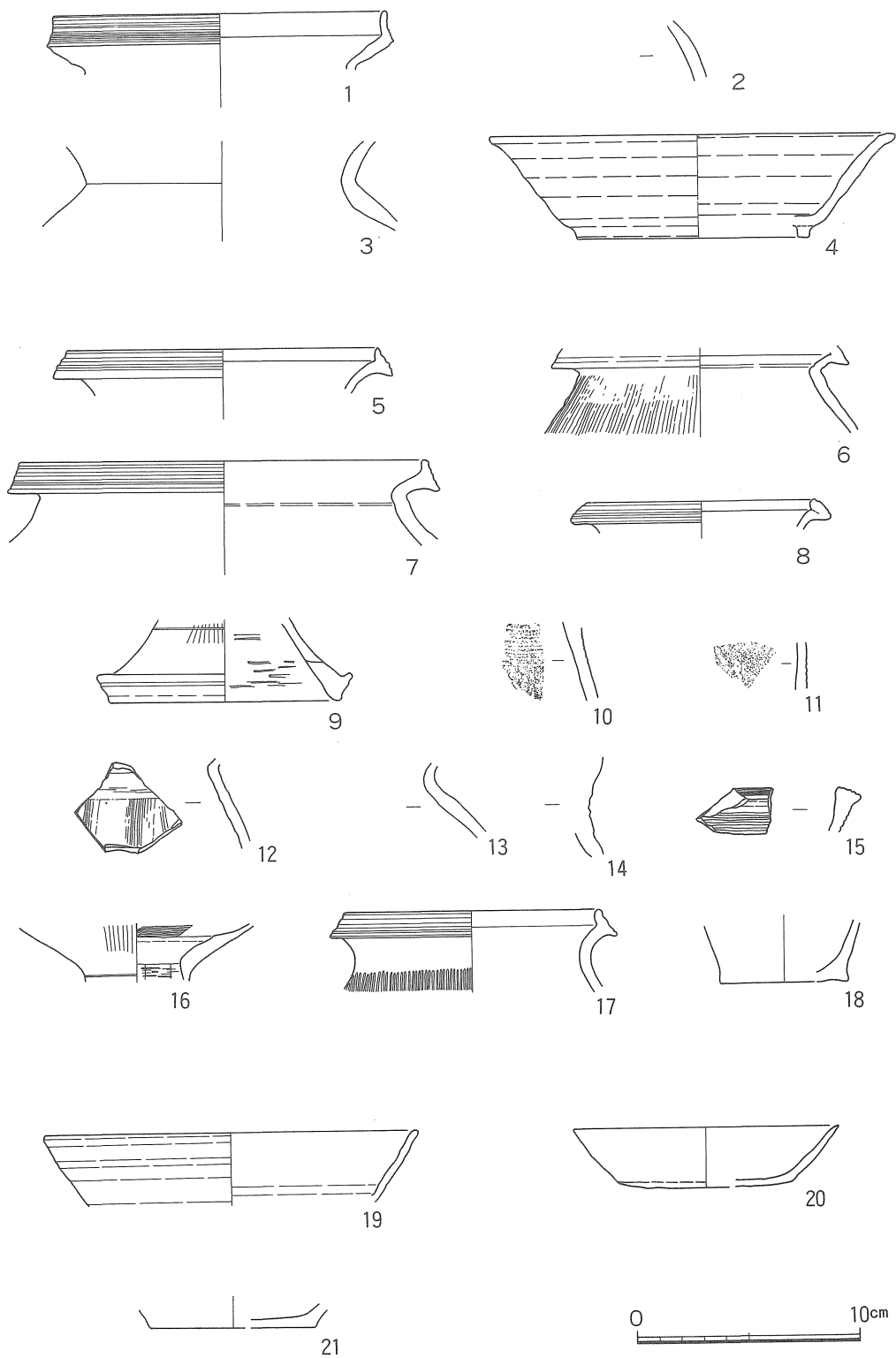
注1 山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 1973 倉敷考古館

2 石器（第13図，図版10-6）

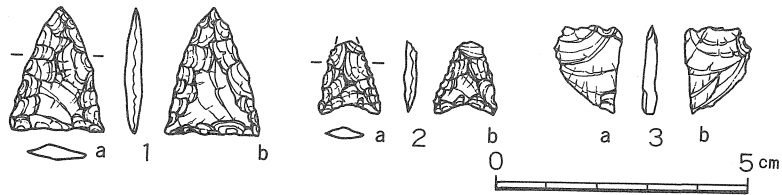
本調査では溝SD2の埋土第(2)層より打製石鏃2点、剥片1点が出土している。いずれも伴出土器より弥生時代中期後半の時期に限定できよう。第13図1は平基式石鏃である。両面の一部に素材の剥離面を残している。長さ2.5cm、幅1.8cmを測る。2は先端部を欠失する比較的小形の凹基式石鏃である。a面右縁の一部は鋸歯縁となっている。3は剥片である。a面右縁側は折れており、剥片末端部は階段状を呈している。以上3点はいずれもサヌカイト製である。

3 木器（第15～19図，図版8～10-1～5）

本遺跡では多くの木製遺物が出土した。このうち明瞭な加工痕を有するものは、大部分が弥



第12図 出土遺物 1 土器



第13図 出土遺物 2 石器

生時代中期後半の溝SD2の埋土中から出土した。これらは流れ込んだ状況で出土したものが多いが、形状は比較的保たれている。また3本の杭が、SD2の底面に打ち込まれた状況で出土した。

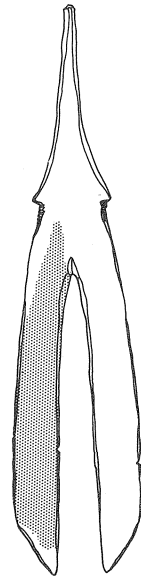
木質遺物のうち用途を推定できるような、いわゆる木器と考えられるものは、わずかに又鋏と杭のみである。他の加工痕を有するものは、その形状から、棒状の加工木と板状の加工木に分類した。樹種鑑定を実施していないため、現時点では各木器の樹種は不明である。

又鋏（第15図、図版8-1）は、本調査に入る前の工事立合中に出土した。そのため明確な出土位置は不明であるが、SD2の埋土中であることは確実である。いわゆる“ナスビ形”と称される二又鋏の半分が欠損したものである（第14図）。先端部、上部とも欠損しているが、二又の付け根部が残存し突起状を呈する。全体的に磨耗しているが、一部に縦方向の削り痕が見える。緊縛痕は不明瞭である。現存長60.8cm、幅約9.5cm、厚さ約1.3cmである。

杭（第16図1～4、図版8-2・3・9-1）は4点あるが、いずれも上端が欠損しており、うち3点（第16図1～3）は打ち込まれた状態で出土した。1は、長さ35.3cm、直径4cmであり、先端部は二面から削られ断面が扁平になっている。4は、長さ37.3cm、直径5cmであり、先端部の削りは他の3点よりやや幅が広い。樹皮がついたままの木材である。2は、長さ27.3cm、直径4cmであり、先端部は片側から削られている。3は、長さ64cm、直径4cmであり、小枝を払った枝材を使用している。樹皮はついたままであったが、取り上げの際に剥落してしまった。

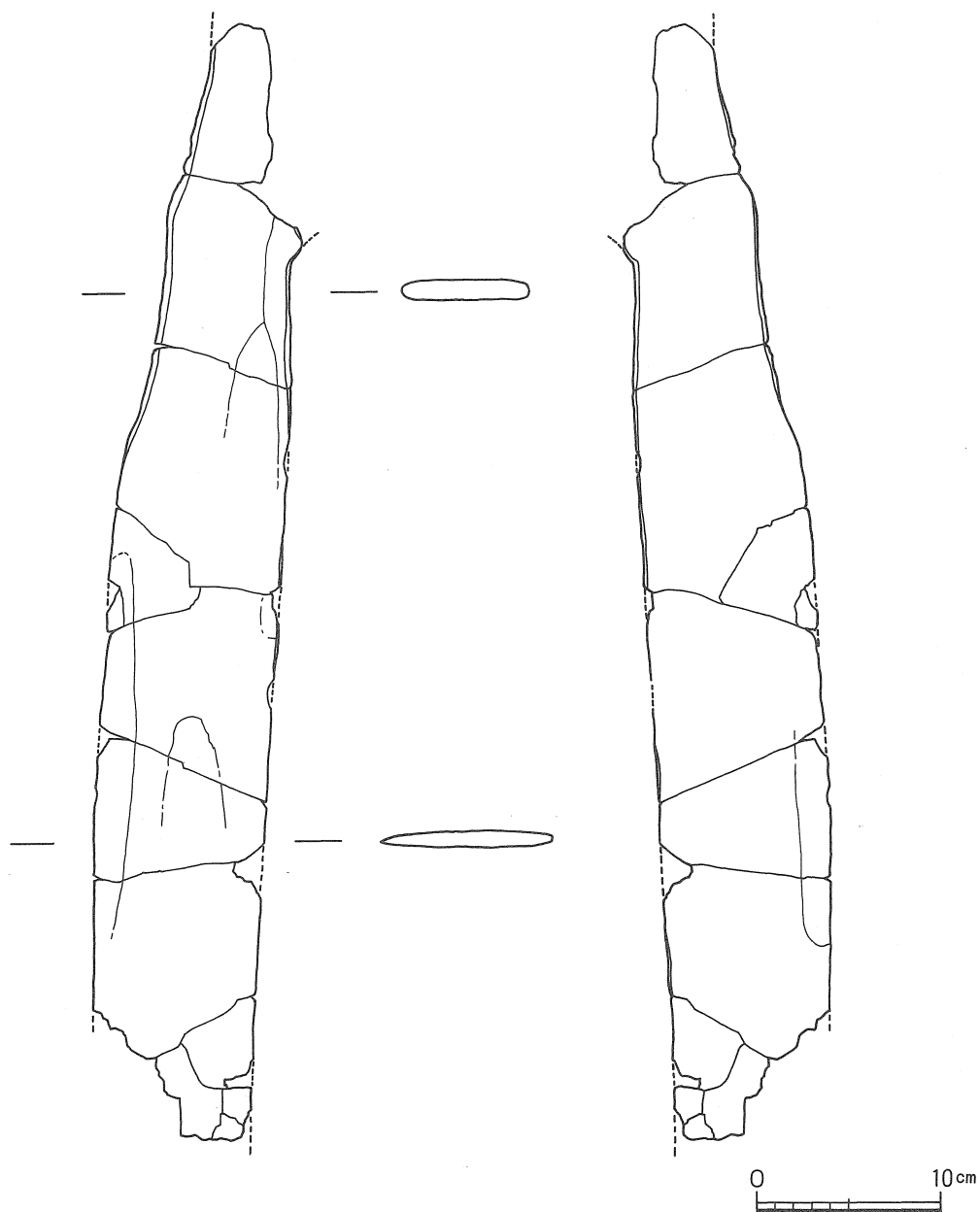
棒状加工木（第16図5、第17図6・7・9・10、第18図11～14、第19図17・19、図版9-2～4、図版10-1～3・5）は11点出土した。5は長さ20cm、直径4cmであり、目の詰まった細かい年輪の枝材である。

一方の端部は丸みをもつ加工痕があり、表面には互いに直交し合う擦



第14図 又鋏復原模式図

痕がみられる。6 は、長さ25cm、幅2cmで、正面は主軸に沿った加工痕がみられるが、両側は保存が悪く不明瞭である。7 は、長さ40.2cm、直径2.7cmであり、枝材を使用している。両端は欠損しているが、全体の3分の2程度に加工痕がみられる。杭に比較して、加工が細かく、



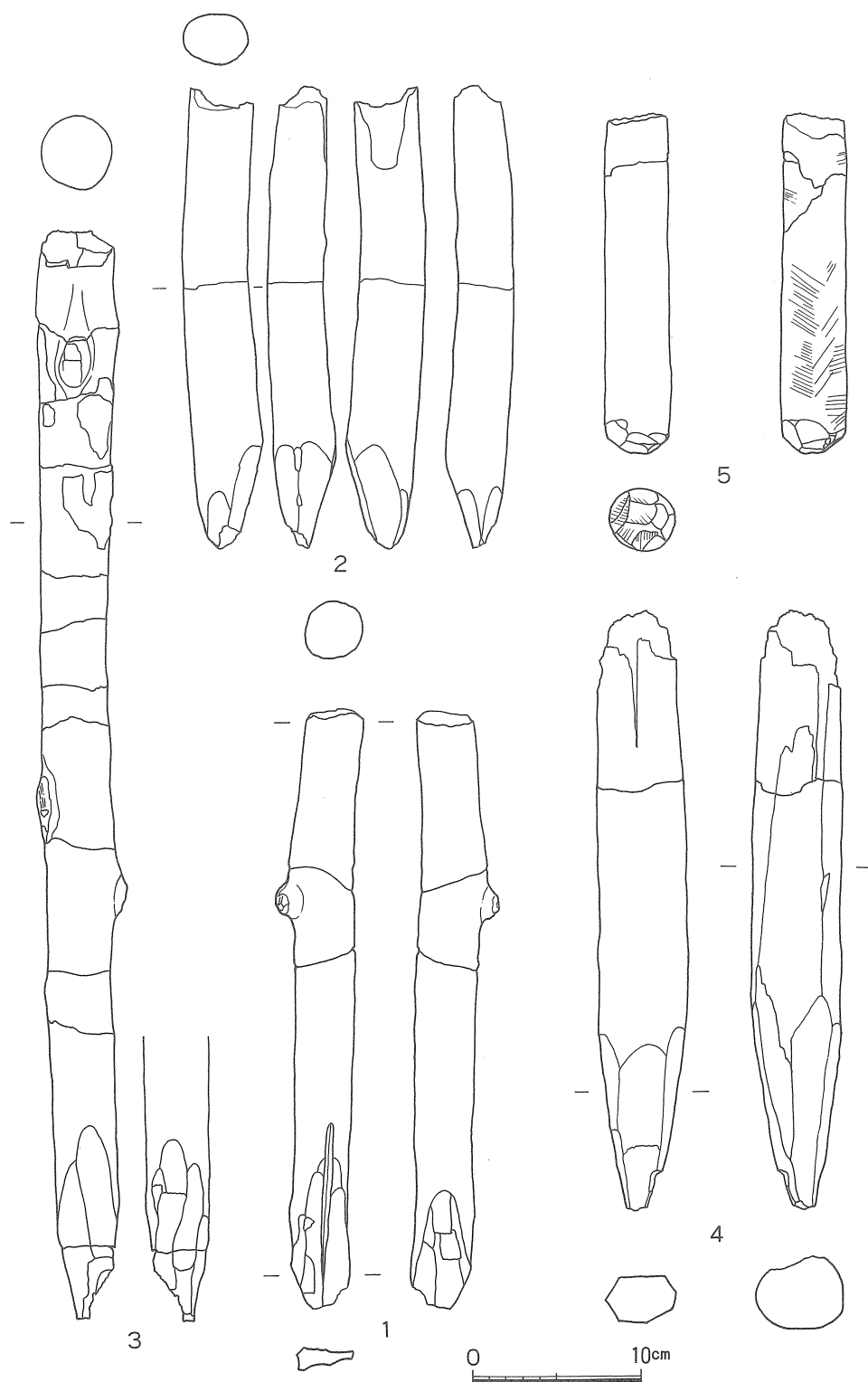
第15図 出土遺物3 木器

遺 物

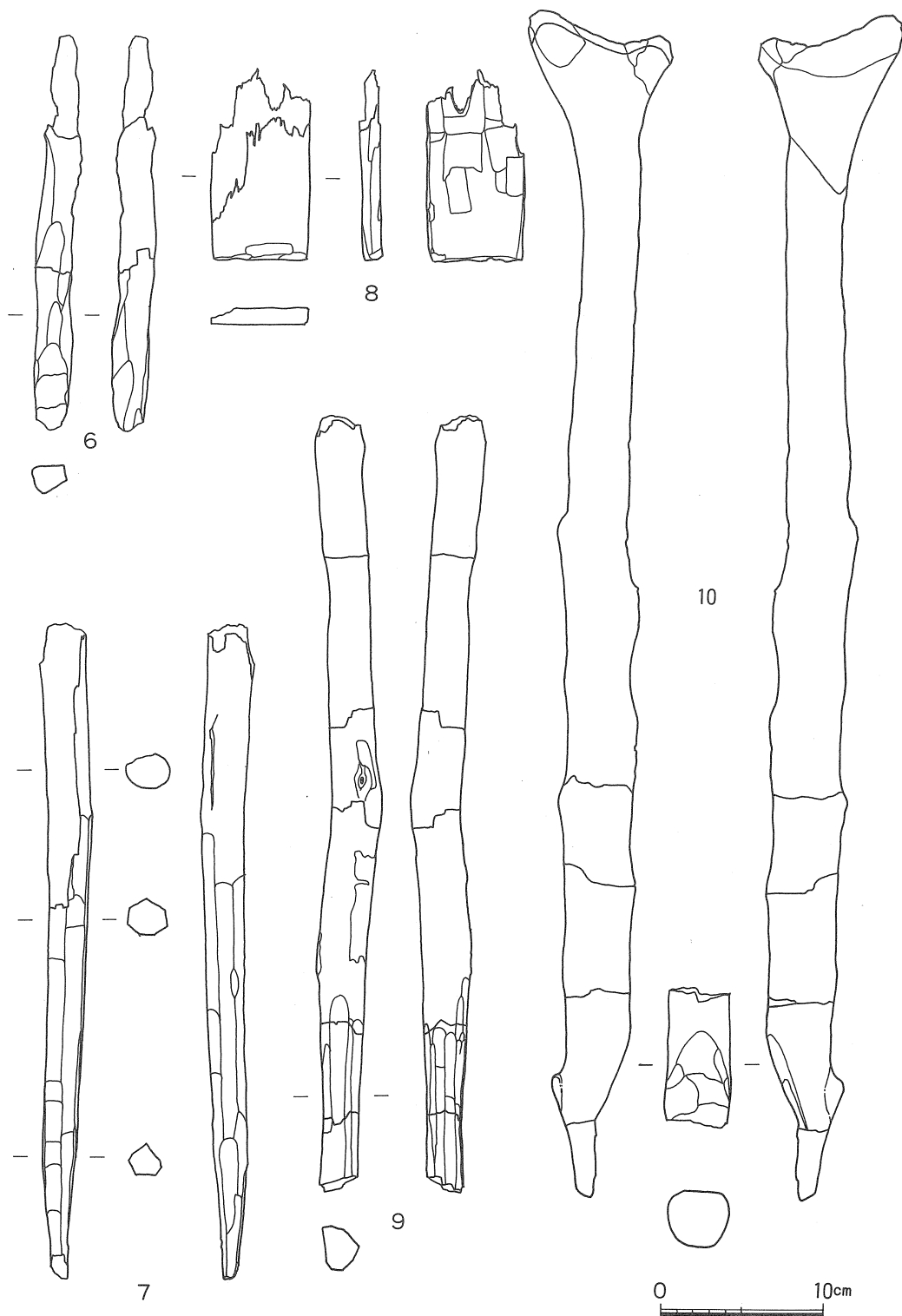
先端は鋭い。9は、長さ47.7cm、直径3.3cmであり、樹皮をつけたままの枝材を使用している。両端は欠損しているが先端部には細長い削り痕が認められる。7と同様の製品と考えられる。10は、長さ71.9cm、直径4.4cmであり、二又にわかれた枝材である。先端部は一部欠損しているが大きな削りによる加工が一面ある。断ち割りのような加工痕を示す。頭部は、二又の付け根にあたり、火を受けて炭化している。11は、長さ64.5cm、直径2.6cmであり、樹皮をつけたままの枝材である。先端部には、断ち割ったような加工痕がみられる。12は、長さ30cm、直径3cmであり、10と同じく二又の枝材である。両端は欠損しているが、加工痕は二又の一方に、図上では右側の先端に断ち割ったような加工痕がみられる。又部を中心にして、一部が火を受け炭化しているが、この点も10と同様である。13は、長さ38.9cm、直径2.9cmである。頭部は周囲を上下二方向から削って円頭状に作り出している。くびれの部分には磨滅痕がみられる。14は、長さ23.2cm、直径9cmであり、太い枝材である。表面はわずかながら面取りの痕跡がみられ、先端部はつぶれたような状態を示し、二方向からの加工によって尖らしている。その先端部に炭化した不明物質が付着している。17は、長さ6.5cm、直径1.2cmで枝材である。上端は折れている。全面にわたって細い削りで仕上げられている。19は、長さ15.9cm、幅2.8cmであり、断面は四角形である。枝材を分割して形を整えてあると思われるが、片方は破損し加工痕が確認できるのは一面だけである。

板状加工木（第17図8，第19図15・16・18，図版10-4）は4点である。8は、長さ11.7cm、幅6cm、厚さ1.1cmであり板目材である。上部は欠損している。下部は焼失し、炭化が著しい。前後左右の四面に加工痕がみられ、断面長方形でかなり整った形状を有している。15は、長さ41.5cm、幅13.8cm、厚さ9.8cmで、半截した丸太材である。材質は又鋏（第15図）と同じものと考えられるが、何らかの製品を製作するための、ある程度加工した原料と考えられる。上面は工事立合中に破損したが、残部は全面に加工痕がみられる。両端は二方向から急角度で断ち割ったと考えられる。丸太材の外側に当たる部分は面取りされて、丸く加工されている。16は、長さ7cm、幅6cm、厚さ1cmであり、板目材である。上部は切断されており、正面は磨耗のため加工痕は明瞭ではないが、裏面は削り痕がみられる。18は、長さ6.8cm、幅5cm、厚さ1.2cmである。下部に斜めに削った面があるが、他には明瞭な加工痕はみられない。

以上、明瞭な加工痕を有する木製遺物について述べてきたが、明確な用途のわかるものは、又鋏と杭のみである。その他のものは破損品と半加工品で用途は判明しなかった。また、加工が明瞭でなく報告しなかった遺物のなかにも炭化し、人為の介在したと考えられるものがあった。



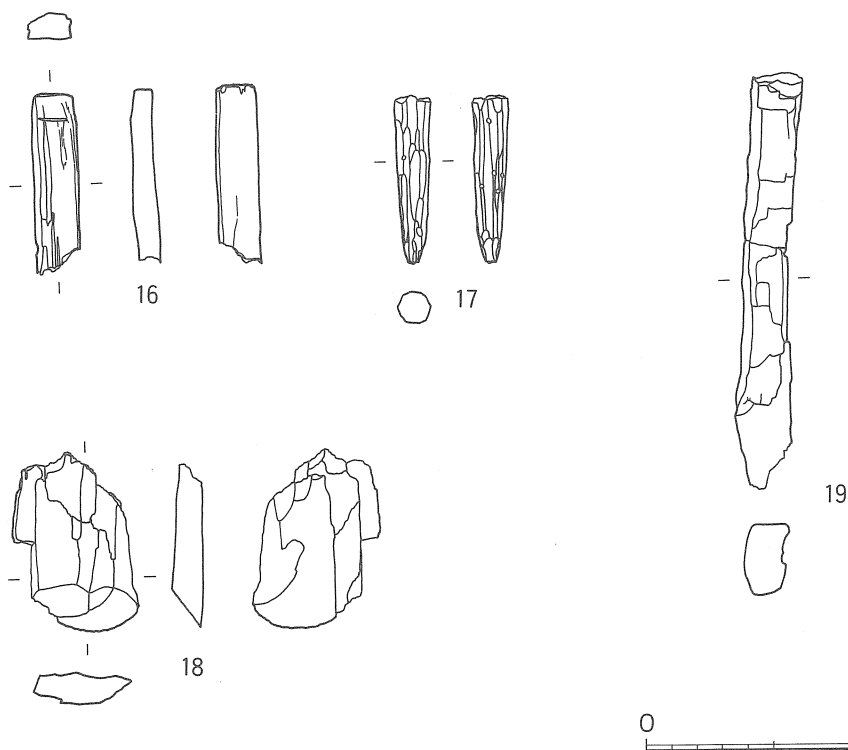
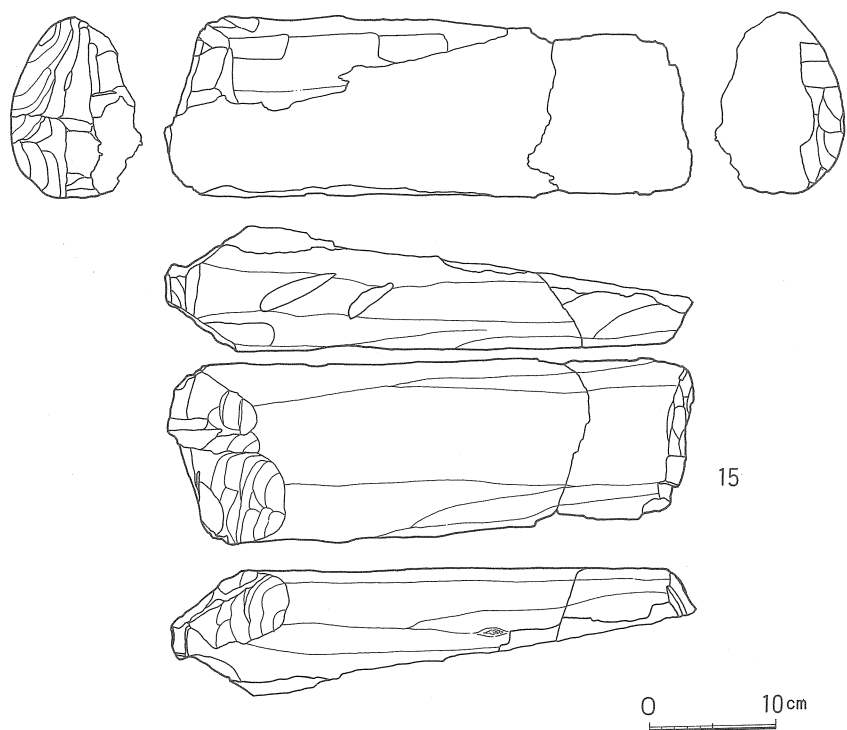
第16図 出土遺物 4 木器



第17図 出土遺物 5 木器



第18図 出土遺物 6 木器



第19図 出土遺物7 木器 (15は 1/6, 16~19は 1/3)



まとめ

調査区は字小橋と法目黒の境界にあたることから、字財木と上横尾間および字久保と八反田間の元来の流路上に位置すると考えられる。これらの点から考えれば、平安時代前半期のSD1およびSD3は条里制に関連する水路と想定される。^{注1、}

以上、今回得られた資料は限られたものであり、その検討は推定の域にとどまる。今後の周辺調査を待って再検討したい。

注1 同様の遺構は津島遺跡でも確認されている。岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』1970

第1表 出土土器観察表

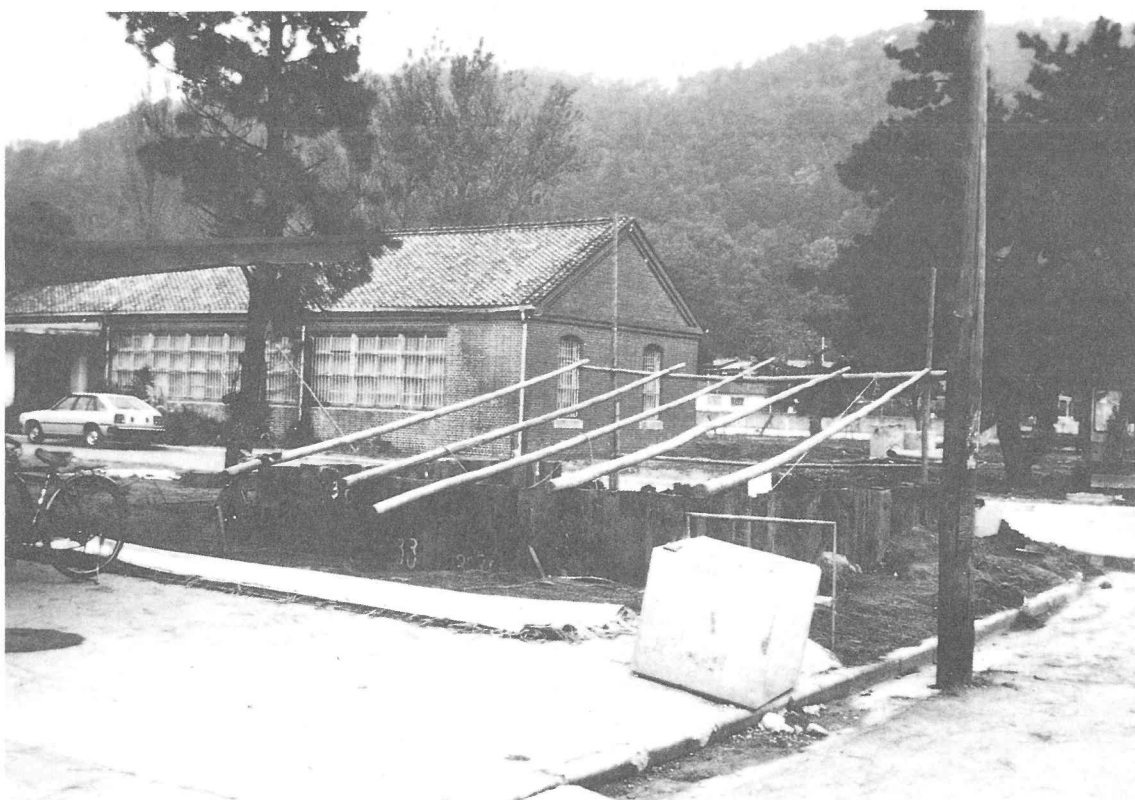
番号	層	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土(砂粒の大きさ・量)	焼成	備考
1	8a	甕形土器	口縁端部外面に8条の沈線文、内外面共に横ナデ	灰褐色	5mm以下多い	良好	復原口径約15cm
2	8a	"	外面上位はへら削り、下位は横ナデ、縦ハケ	淡灰褐色	1mm以下多い	"	下半部に媒付着
3	8a	壺形土器		暗褐色	"	普通	
4	8a	須恵器杯	やや外反する口縁部、端部は丸くおさまる、底部に断面正方形の貼り付け高台、内外面共に横ナデ	灰色	2mm以下多い	良好	復原口径約17.8cm
5	SD2(2)	甕形土器	口縁端部外面に4条の凹線文、内外面共に横ナデ	淡黄白色	1mm以下多い	"	" 14cm
6	"	"	口縁端部に3~4条の不明瞭な凹線文、胴部外面は縦ハケ後横ナデ、その他は横ナデ	灰黄褐色	0.5mm以下少量	"	" 12cm
7	"	"	口縁端部に4条の凹線文、内外面共に横ナデ	外面暗茶褐色 内面灰褐色	1mm以下多い	"	" 18.5cm
8	"	"	口縁端部に浅い3条の凹線文、内外面共に横ナデ	灰黄褐色	0.5mm以下少量	"	" 10cm
9	"	高杯	脚部中程に沈線1条、三角形の透し孔が6ヶ所推定 脚端外面に不明瞭な2条の凹線文、外面は縦位のへらミガキ、脚端は横ナデ、内面は横位のへら削り	"	0.5mm以下多い	"	復原脚端径約10.5cm
10	"	壺形土器	7条の沈線文、外面は横ナデ、内面は横位のへら削り、シボリの痕跡	淡灰褐色	0.5mm以下	"	
11	"	"	貝殻腹縁による波状文、内外面共に横ナデ	灰褐色	1mm以下	"	
12	"	"	外面は縦ハケ、内面はナデ、内外面共に頸部付近に横ナデ	灰黄褐色	2mm以下少量	"	
13	"	"	外面横ナデ	淡赤褐色	0.5mm以下多い	普通	
14	"	"	4条の沈線文	淡灰褐色	1mm以下多い	やや不良	
15	"	鉢形土器	やや内湾する口縁端部を押さえて面をつくり、外方へつまみ出す、口縁外面に5条の凹線、上端面に5条の凹線文、内外面共に横ナデ	灰黄褐色	0.5mm以下少量	良好	
16	SD2(5)	高杯	軸部に1条の沈線文、杯部外面は縦位のへらミガキ、内面は横ハケ、軸部外面はナデ、内面は横位のへら削り、円盤充填の痕跡	外面暗茶褐色 内面灰褐色	0.5mm以下少量	"	
17	SD2(3)	甕形土器	口縁端部に4条の凹線文、外面縦ハケ、口縁部は内外面共に横ナデ	淡灰褐色	"	"	復原口径約11.5cm
18	"		底部縁は指頭圧後ナデ、胴外面最下部はへらミガキ	灰黒色	0.5mm以下	"	復原底径約5.8cm
19	SD1⑩	須恵器杯	外上方へ直線的に立ち上がる体部、端部は丸くおさまる、内外面共に横ナデ	灰白色	"	"	
20	不明	土師器皿	口縁体部はわずかに外反、内外面共に横ナデ、底部外面は不整のナデ	淡赤褐色	1mm以下	"	復原口径約12cm
21	SD1⑩	須恵器杯	底部外面以外は横ナデ	灰黄褐色	0.5mm以下少量	"	復原底径約7.2cm

第2表 出土石器観察表

番号	器種	出土層位	長さcm	幅cm	最大厚cm	重量g	石質
第13図1	石鏃	SD2(2)	2.5	1.8	0.3	1.3	サヌカイト
第13図2	石鏃	SD2(2)	(1.4)	1.3	0.3	0.4	サヌカイト
第13図3	剥片	SD2(2)	1.7	(1.3)	0.3	0.6	サヌカイト

図

版



1 調査区近景（南から）



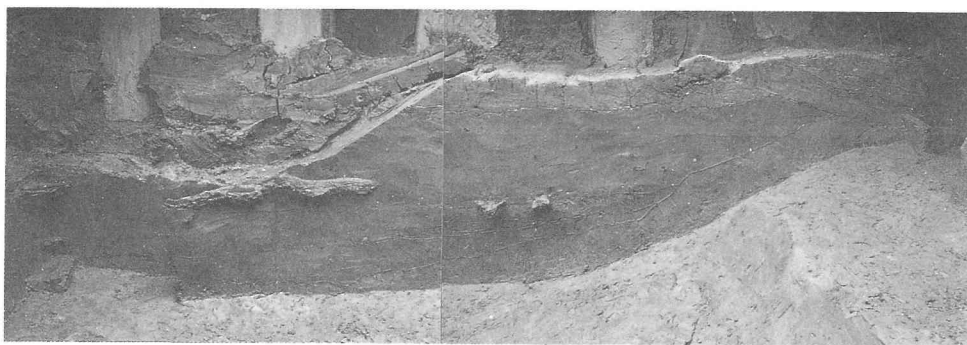
2 調査区近景（北から）



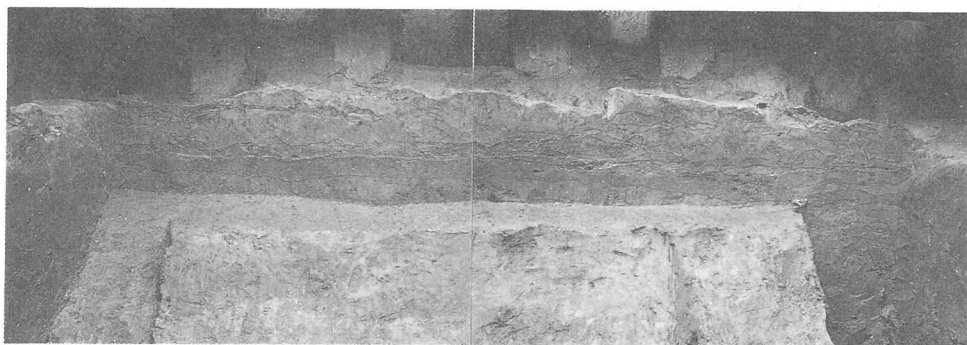
1 調査区全景（西から）



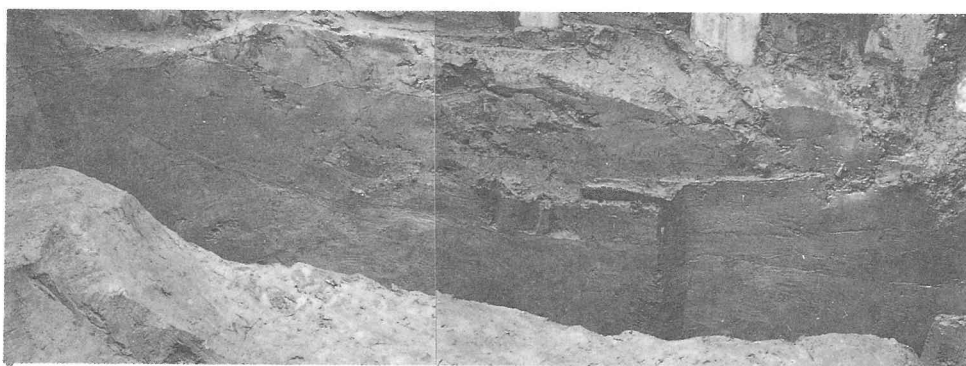
2 調査区全景（東から）



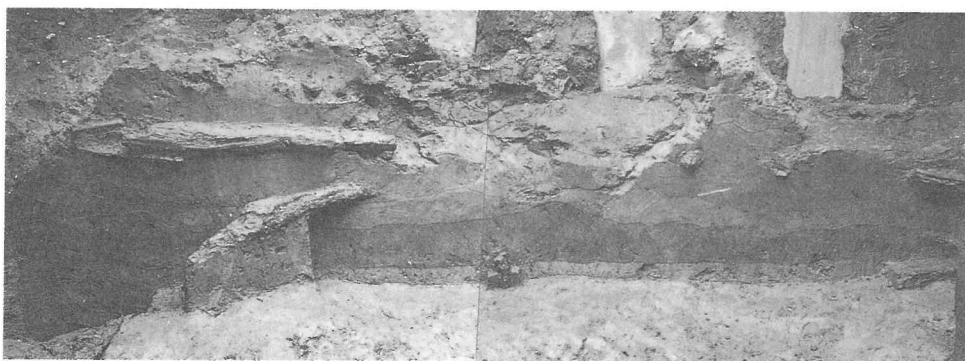
1 東壁



2 南壁



3 西壁（崩壊前）



4 北壁



1 S D 1横断面 (東壁南端)



2 杭1出土状況 (南より)



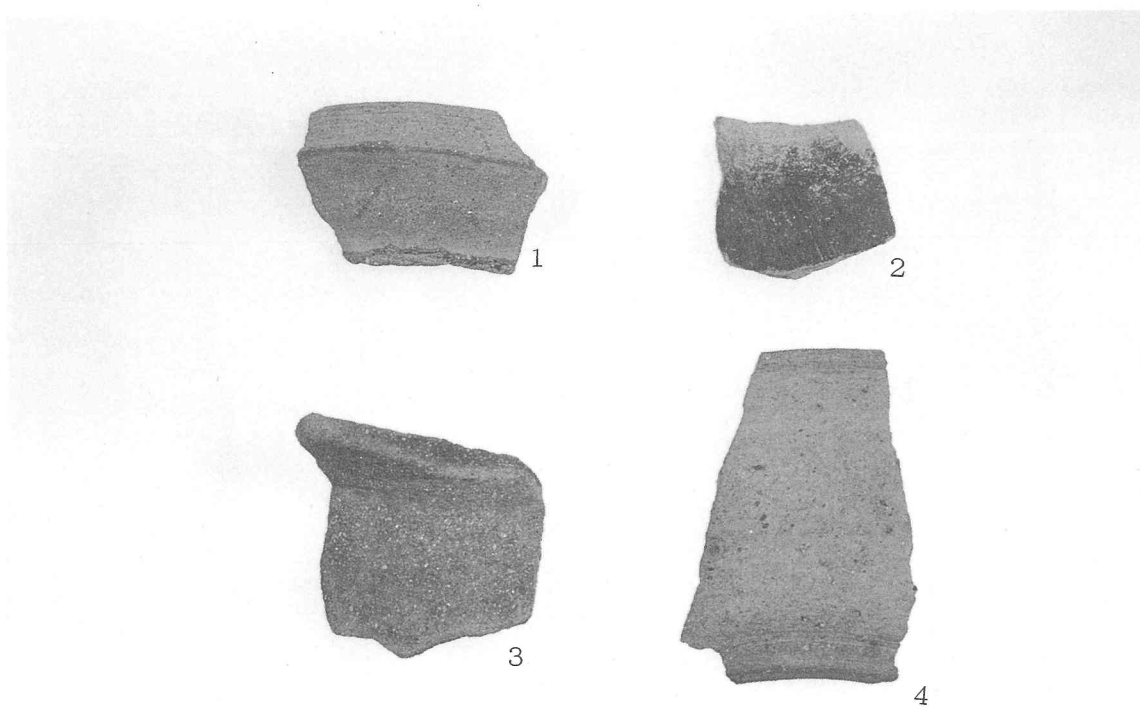
1 杭2出土状況（南より）



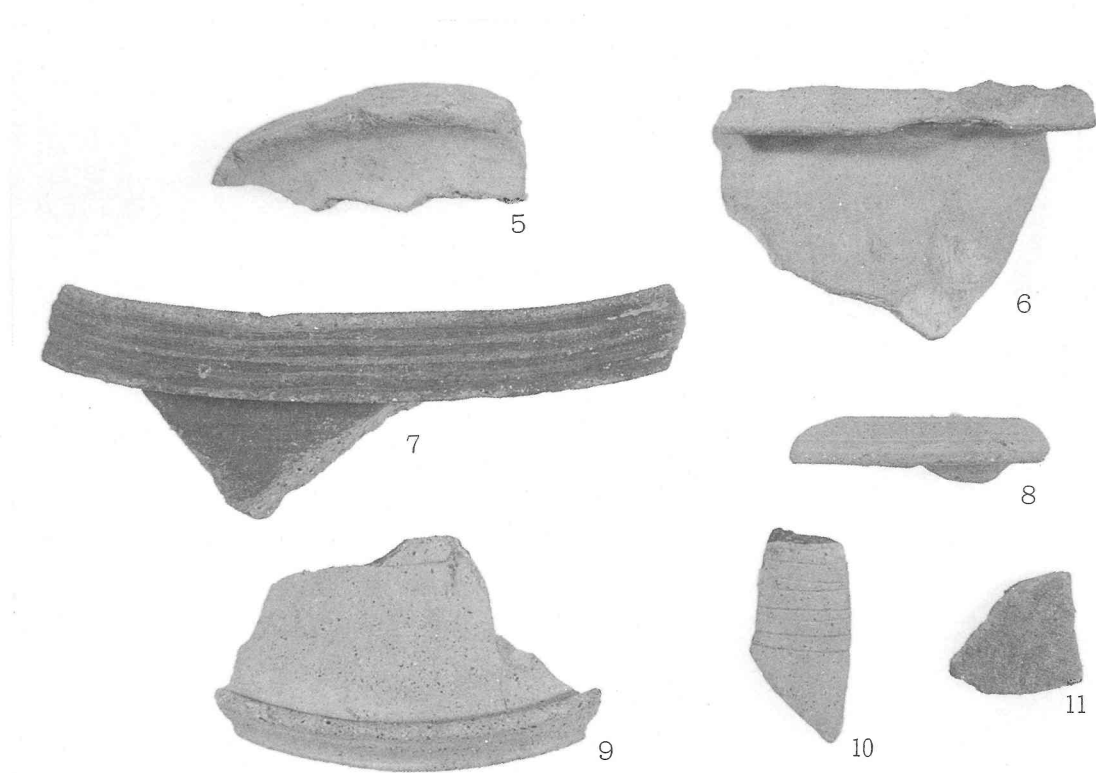
2 杭2出土状況（西より）



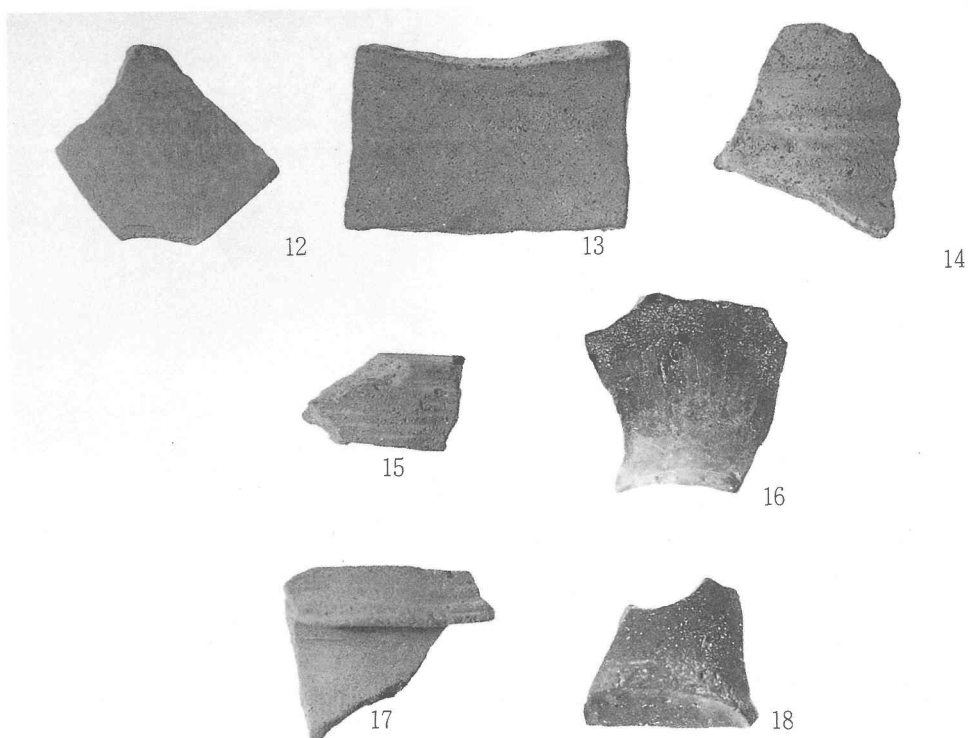
3 杭3出土状況（東より）



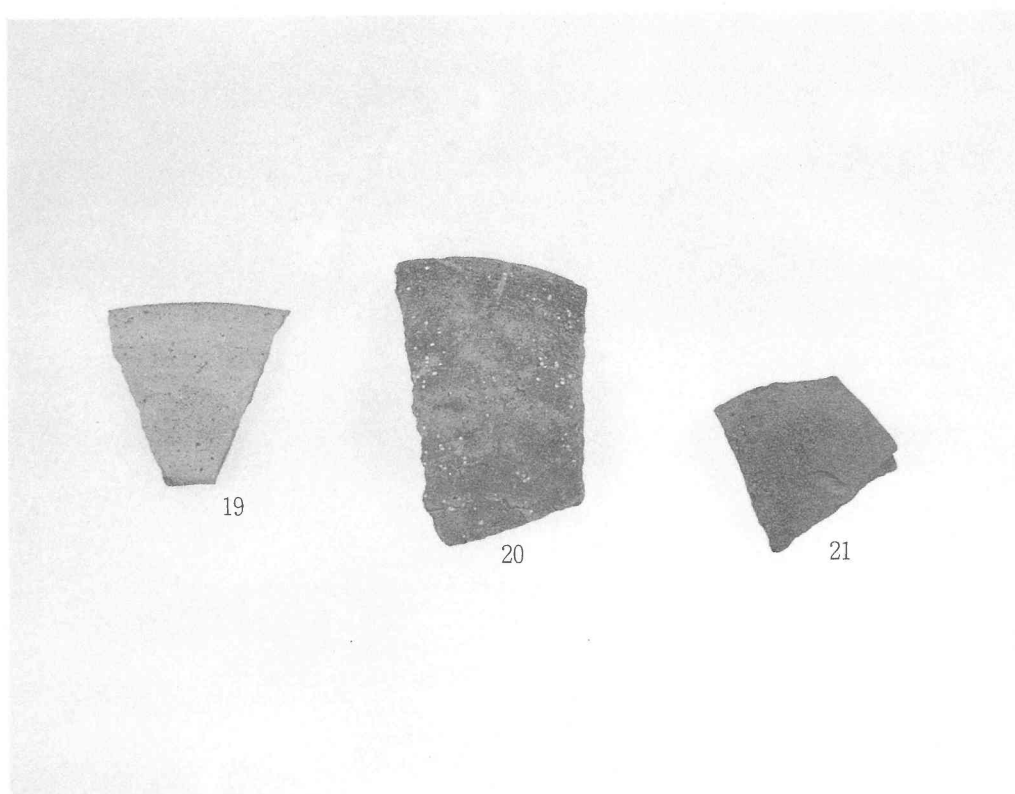
1 第8a層出土土器



2 SD2出土土器



1 SD 2出土土器



2 SD 1出土土器他



1 又 楸



2 杭 1



(拡大)



3 杭 4



(拡大)



1 杭3



(拡大)



2 棒状加工木 5



(拡大)



3 棒状加工木 7



(拡大)



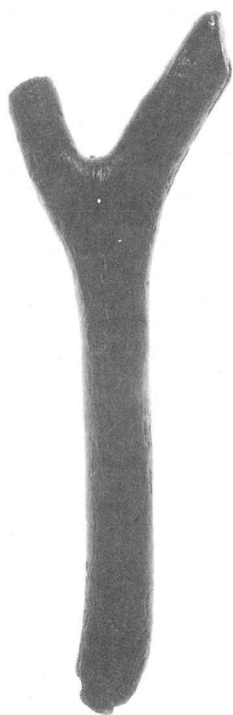
4 棒状加工木 9



(拡大)



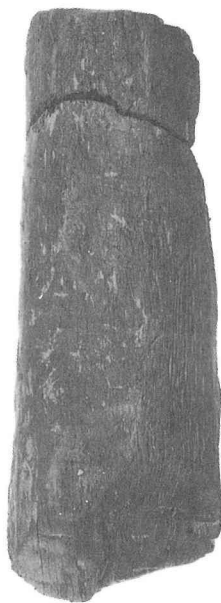
1 棒状加工木 10



2 棒状加工木 12



3 棒状加工木 17



4 板状加工木 15



5 棒状加工木 14



1



2



3

6 石器 (1・2石鏃 3剥片)

昭和60年4月30日印刷

昭和60年5月 7日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集

岡山大学津島北地区

小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査

編 集 岡山大学埋蔵文化財調査室
発 行
岡山市鹿田2丁目5番1号

印 刷 株式会社 三 浦 印 刷 所
岡山市奥田1丁目3番18号
電話(0862) 24-7247(代)